

トインビーと宗教

川窪啓資

※本稿は2016年10月25日、東京・新宿区のTKP市ヶ谷カンファレンスセンターで行われた講演内容に加筆していただいたものです。

ご紹介いただきました川窪でございます。講演のテーマは「トインビーと宗教」となっておりますが、大変大きなテーマでもあり、本日はアーノルド・トインビー博士個人の伝記を基軸として、また私の体験したことをご紹介しながら、大筋だけをお話しさせていただければと思います。

博士の精神史をたどって

トインビーの人生史と申しまでも、単に外在的な伝記を述べるのではなく、その精神史を伝記的にたどろうということなのです。彼は歴史家であり、周知のように大著『歴史の研究』(A Study of History / 原著では十二巻、邦訳『完訳歴史の研究』では二十五巻)をはじめ多くの著作を著していますが、自分の個人的なことはあまり書いておりません。そして従来、研究者は彼の本領たる歴史あるいは文明論のほうに研究の視点を向け、

トインビーの内面生活には注意を払ってこなかったきらいがあります。

いえ、注意を払おうにも資料がないので払えなかったのです。たしかに、彼には『交遊録』（長谷川松治訳、社会思想社／*Aquaintances, Oxford University Press, 1967*）や『回想録』（I・II、山口光朔・増田英夫訳、社会思想社／*Experiences, Oxford University Press, 1969*）などの著作もあります。しかしそれらはトインビーの内面生活に深く関わるものではありませんでした。

トインビー自身があまり私生活のことを語りませんでした。彼は十九世紀末のイギリスに生をうけているわけですね。ヴィクトリア朝の考え方、残映をとどめている社会ですから、最近のあからさまな文章表現やファッション、映像などが瀾漫している社会風潮とはまったく違う空気を吸って育っているわけです。ですから、おのずからラテン語の「ピエタス (*Pietas*)」すなわち「敬虔」「敬い」という感情がはたらくのです。

これについて、トインビーは次のように述べています。

「大抵の人の経験の中には、非常に深く愛し、あるいはうやまつているので、もしまだ生きている人なら、傷つける危険を冒したくないし、また、もしすでに死んだ人なら、その声価に疑いをさしはさむ危険を冒したくない人物がある。そのためにわれわれはそのような人物の思い出を公表するのをはばかるのであるが、それは単にそれらの人びとのためばかりでなく、われわれのためでもある。もし気のとがめを抑えて、みずから課した禁制を破れば、あとで後悔せねばならないことを、われわれは知っている」（『交遊録』一頁）

そういうわけで、あまり自分のことを語らない人なのですが、トインビーの死後にわかってきたことも含めてお話ししたいと思います。

英国国教会の家系

トインビーの人間性ということを考える場合、やはり家の伝統というか、その家系から話したほうがわかりやすいと思いい、博士の精神史を図解した木を描いてみました。

Arnold J. Toynbee (1889 – 1975) の精神史の図解の木

No Image

トインビーの家はイギリスの知的な中産階級に属しています。父方のほうは、千百年以上にわたるキリスト教徒です。先祖が千百年ほど前にデンマークからイギリスに渡来したようで、デーン人が支配する「デーンロー (Daneraw)」というイギリス東部の地域に住んでいました。母方のほうも千三百年以上のキリスト教徒です。

博士が生まれたのは一八八九年ですから、まだ大英(帝国)の最盛期といつてよいでしょう。そういう時代に、両親ともアングリカン・チャーチ、つまりイギリス国教会の信徒という家庭に生まれました。教育も、ウォリックハウス小学校、ウトンコート寄宿学校、英国最古のパブリック・スクールであるウインチェスター校、オックスフォード大学(ベリアル・コレッジ)と、イギリスの名門校でずっと学んでいます。そこで徹底的に古典語の、つまりギリシヤ語とラテン語の教育を受けています。

お父さん(ハリー・ヴァルビー・トインビー)は貧しい労働者階級を救おうとして奔走した社会実業家であり、

中産階級の中でも裕福とはいえない家庭だったようですが、子どもには最上の教育を与えようとしたのでしよう。お母さん(サラ・エジス・トインビー)は、ケンブリッジ大学(ニューナム・コレッジ)で学び、歴史の卒業試験で最優秀の成績を取ったという才媛でした。トインビーは幼いころ、この母親から毎晩、イギリスの国史をはじめとする西洋史を寝物語として聞かせてもらったそうで、博士は「母は、私のまだごく幼いうちに、自分の歴史に対する興味を私に伝え、私のうちに生涯を通じて変わらぬ歴史に対する興味を目覚めさせてくれた」と述懐しています(邦訳『歴史の研究』経済往来社、第二十巻、三九五―六頁)。彼が歴史家になったのは、お母さんの影響が大きかったわけです。

お母さんだけではなく、トインビーの家系は大変に知的な人物が多いのです。伯父さんにダンテ学者のパジェット・ジャクソン・トインビー(一八五五―一九三二)や、「産業革命 (Industrial Revolution)」という言葉を普及させた経済史学者のアーノルド・トインビー(一八五二―八三)がいます。この同名の伯父と区別するた

めに、博士は「J」を入れて「アーノルド・J・トインビー」と署名することにしたと言われています。博士の妹二人も歴史関係の学者であり、ひとり（ジョスリン・トインビー）はケンブリッジ大学の古典考古学の教授でした。

宗教的不可知論者になる

このように、トインビーは生まれながらのクリスチャンであったわけですが、次第に、さまざまな疑問が彼を苦しめるようになります。幼くしてすでに、マリアによる処女懐胎の教えや、天地創造が紀元前四〇〇四年に起こったなどの話には疑問をもったようです。

オックスフォード大学時代には、キリスト教への疑問がますます高じてきて、宗教は錯覚ではないかと考えるようになります。自分はクリスチャンではあるけれども、「あなたの宗教はどういうものですか」と訊かれた場合、自信をもって説明はできないと。正直な人ですから、そう考えたわけです。どうすれば、キリスト教というものを人にわかるように語れるか。いな、

そもそも自分が信じているキリスト教というのは本当に正しい宗教なのか。そういうことまで真剣に考えました。

知的に非常に活発な人ですから、他の宗教も勉強しました。ヨーロッパには、キリスト教以外にユダヤ教もあるし、キリスト教にもさまざまな流れがあります。アングリカン・チャーチとは違う、ローマ・カトリック教会や、プロテスタントの諸派がある。さらに、ヨーロッパ以外には、イスラームがあり、イランの宗教があり、インドの宗教がある。イギリスはインドを征服して植民地にしていましたから、インドの宗教にも関心もち始めました。さらに、中国には孔子の教えもあれば道教もある。日本の宗教もある——というふう

に、だんだんと自分の生まれた文明圏から離れたところまで探求の目を広げました。そして、このように世界の宗教ということを考えると、何が本当なのかかわからない。そういうなかで、一体、自分はどうすれば確信がもてるか。だんだん信じられなくなってきたわけです。

そして、大学時代に「宗教的不可知論」の立場をとるようになります。不可知論というのは、神とはこういうものだということは言えないという立場です。神の存在とか性質については、人間の能力を超えた問題であり、神が存在するかどうかということについても、語る力をもたないということです。人間の理性や知恵では、神については認識できない、わからない。これが不可知論です。クリスチャンであれば、神様はこういうものだと信じなければいけないし、キリスト教こそが真理を伝えている唯一の宗教であると信じなければならぬ。しかし、若きトインビーは、そういう確信をなくしていきます。英国国教会に属することを否認したわけではないのですが、理性的には「不可知論」、こういう立場になります。

彼はこう書いています。「私はオックスフォードの学生の頃に不可知論者になり、最初は、キリスト教の伝統的な正統的信仰を自分が失ったために、宗教自体が一つのつまらぬ錯覚であると結論した。それから半世紀以上たった今でも（中略）私は依然として不可知論者

である。しかし私は、宗教は実在を事とするものであってこの実在はこの上なく重要なものであると考えるに至った」（邦訳『回想録』Ⅰ、一七一頁）

この「実在」のことを彼は「アルティミット・スピリチュアル・リアリティ（Ultimate Spiritual Reality）」すなわち「究極的精神的実在」と呼んでいます。これについては、後ほど触れます。

「出会い」そして「ゆかりの地訪問」

ここで、私が博士にお目にかかったときのお話をしましょう。私は三六歳でした。一九七二年四月のことです。ロンドンのご自宅を訪問したのです。お宅は、ハイドパークのそばにある静かな住宅地の一角にあり、こげ茶色のフラットのたしか四階でした。訪問したのは、麗澤大学の廣池千太郎学長とご家族、明治大学の野辺忠郎教授、そして私です。トインビー博士は一人ひとりと握手してくださいましたが、その手は柔らかく、まことに温かい人柄が伝わってきました。私が通訳したのですが、文明論とか、国際情勢、博士の日

本訪問の思い出など、さまざまなことが話題になりました。トインビーは、世界史上のさまざまな宗教や思想を探究しぬいた方で、すべてを包容するというか、そういう大きな人格の力を感じました。会った人は皆、博士を好きになるし、敬愛の念をもつと思います。対立とか抗争などは起きないでしょうね。素晴らしい方でした。私も、本当に懐かしく思い出します。

それから二十二年たった一九九四年の七月、トインビー博士の跡を訪ねて、イギリスの各所を回りました。ロンドンでは、トインビーが三十三年間も務めた王立国際問題研究所、通称チャタム・ハウスも訪ねました。ここで彼は『国際問題大観』を毎年、書き続けたわけです。

ロンドンから列車で二時間ほど北上すると古都ヨークですが、その北東十五キロのところに、トインビーゆかりの「ハワード城」があります。私はレンタカーでまいりました。一万エーカーもの敷地に建てられたバロック式の大邸宅です。ここは、トインビーの最初の奥さんの母方の実家です。トインビーは二回結婚し

ていますが、一九一三年、最初に結婚したロザリンド・マリーは、有名な古典学者ギルバート・マリーの娘さんでした。お母さんがハワード伯爵家の出身であり、結婚後、トインビーはたびたびハワード城に滞在し、『国際問題大観』の一九二七年版もここで執筆しています。

ロザリンドさんは、トインビーとの間に三人の男子（長男アントニー、次男フィリップ、三男ローレンス）をもうけていますが、トインビーの許可を得て、三人にカトリックの洗礼を受けさせます。そして彼女自身も一九三二年頃にカトリックに入信します。夫は英国国教会の信徒ですから、これは多くの日本人が考える以上に重大な出来事でした。それに加えて、博士の研究一筋の生活への不満とか、さまざまな不協和音が大きくなっていった、一九四六年に離婚に至ります。それまでの数年間は、トインビーにとって、苦悩のどん底の日々だったようです。

はじめに申し上げたように、トインビー自身は、自分のプライベートなことについては沈黙を守っていましたが、博士の内面生活を明らかにするふたつの書

物がありました、そこからさまざまなることがわかります。

ひとつは『一歴史家の良心』という往復書簡集です。

これはトインビーとコロンバ・ケアリー・エルウイズというカトリックの司祭との三十七年にもわたる手紙のやり取りです。それをクリスチャン・ピーパーという学識のあるアメリカの弁護士さんが編纂しました(*An Historian's Conscience: The Correspondence of Arnold J. Toynbee and Columba Cary-Elwes, Monk of Ampleforth*, edited by Christian B. Peper, Beacon Press, 1986 / 未邦訳)。あまり紹介されていませんが、この往復書簡は、トインビーを理解するためには非常に重要なものです。私信ですから、トインビーの内面生活がよくわかるのです。

もうひとつの著作は、ウィリアム・マクニール氏による本格的伝記です。トインビーの伝記としては、これが一番しつかりしています (William H. McNeill, *Arnold J. Toynbee: A Life*, Oxford University Press, 1989 / 未邦訳)。しかし、この伝記も、その多くを往復書簡集に負って

いるのです。

コロンバ師は「アンプルフォース修道院」の司祭でした。広い敷地に修道院と付属の学校があり、トインビー夫妻の三男ローレンスさんがこの学校に入り、その担任がコロンバ司祭だったという関係です。私は、ローレンスさんとその奥さんであるジーンさんに案内していただいて、ここも訪問いたしました。(注：川窪講師はローレンス氏による「父の思い出——人間トインビーを語る」を訳出している。トインビー生誕100年記念論集「人間と文明のゆくえ」日本評論社刊所収)

また、トインビーが一九三〇年から三九年まで、『歴史の研究』の最初の六巻を執筆したという「ギャンソープ館」にも案内していただきました。ローレンスご夫妻が長年住んでおられた家で、その時はご夫妻の長女ご一家が住んでおられました。夫妻のお母さんのロザリンドさんが実家から相続した屋敷だそうです。かなり大きな二階建ての邸宅で、その屋根裏部屋が、トインビーの「執筆場所」でした。部屋に入って、大きな窓から私が見ると、ヨークシャーのなだらかな丘

陵地帯が美しく広がっていました。トインビーが来たころは、もつともつと閑静だったことでしょう。またロンドンよりも涼しいですから、トインビーは夏の四カ月間、この静かで快適な環境で、集中して執筆に励んだそうです。その部屋はとても質素で、こういう場

所で彼が執筆していたのかと思って親しみを感じました。

その後、ご夫妻に案内されて、トインビー博士のお墓にも詣でました。キャンソープ館から車で数分のところでした。村の墓地にある小さな墓石だけのお墓で

した。博士と、二番目の奥さんであるヴェロニカ夫人が、一基の墓に眠っておられました。世界的名声をもつ大学者にしては、あまりにも簡素なお墓でしたが、考えてみると、博士の謙虚な人柄にまことにふさわしいものかもしれません。

「宗教優先の歴史観」への転換

さて、トインビーとコロンバ司祭との文通は、トインビーが四七歳から八五歳まで、つまり一九三七年一月から、亡くなる前年の一九七四年八月まで、三十七年七カ月にわたって

No Image

No Image

キャンソープ館と、館でのトインビー博士の仕事場の一部

(1994年、講師撮影)

続けられました。コロンバ師が三三歳から七〇歳までの期間です。

その間、トインビーは有名な『歴史の研究』を書き上げています。原著で十二巻ありますが、まず三巻まで一九三四年に出て、六巻までが一九三九年に出ます。一九五四年に十巻まで出版され、一九五九年に十一巻、「再考察」として一九六一年に十二巻が出ます。

大まかに言えば、前半の一卷から六巻は、文明の研究です。それまで一般的であった「国家単位の歴史観」を「文明単位の歴史観」に大きく転換しました。そして後半の七巻からは高等宗教に力点が移っていきます。原著では七巻以降、邦訳では十四巻以降です。

文明の研究を続け、世界のさまざまな文明を比較していったわけですが、トインビーはそこから文明の核心にある宗教のほうにだんだん関心が向かっていったわけです。その意味で、彼にとって、文明の研究と宗教の研究というのは一体です。比較文明学と比較宗教学が一体化しています。

虐げられた人々の中から高等宗教が

では「宗教優先の歴史観」というのは何かといますと、ふつうは「宗教は文明の一要素」と考えますね。文明が主で、宗教が従です。ところが、トインビーは反対に「高等宗教の深化・発展のために文明がある」というのです。宗教が主で、文明は従です。具体的に言えば、ひとつの文明が他の文明と出会い、征服されてしまったとき、敗北した側の文明が、その苦悩の中から高等宗教を生み出していくということです。虐げられ、自己の尊厳を否定され、辛酸をなめ尽くした下層の人々の中から、そうした「挑戦」に対する「応戦」として高等宗教が生まれてくる。勝ったほうは、精神的に成長しないわけです。そして、このようにして生まれた高等宗教は、ひとつの文明だけに通じるようなものではなく、他の文明の人間の心もつかむ普遍性をもっていて、世界宗教として広がっていく。実際はもっと複雑ですが、大筋としてこういう歴史観・宗教観をトインビーはもつようになりました。

その「高等宗教」とは、先ほど申しました「究極的

精神的實在」に人間を触れさせていく宗教です。すなわち、人間の原罪ともいふべき「自己中心性」を克服するための三つの基本パターンとして、彼は「自然崇拜」「人間崇拜」そして「高等宗教」を挙げます。高等宗教とは、自然を崇拜するのではなく、個人や人間集団を崇拜するのでもなく、それらの内にあって、しかもそれらを超えている一つの絶対的實在に向かつて自己中心性を超克していることとするものだというのです。

苦悩の中から生まれた歴史観

大事なことは、この「高等宗教優先史観」の背後には、トインビー個人の苦悩とその克服の努力が潜んでいるということなのです。

コロンバ司祭は、編者のピーパー氏にあてて、こう書いています（一九九三年六月十五日付の書簡）。

「アーノルド〔トインビー〕はもともと靈的価値を信ずる精神的な人間であった」

「アーノルドの生涯で決定的なエピソードの一つは眠りの中に、アンプルフォース修道院の高い祭壇の上に

ある十字架の夢を見たことである。その最善の叙述は幸運にも彼自身の言葉で記録されている。

肉体的に病にかかり、精神的に苦しんでいた一九三六年の夏、彼〔トインビー〕は眠れない夜の短い眠りの間に、アンプルフォース修道院の高い祭壇の上に突き出ている十字架の足をつかみ、彼に語りかける「しがみついて待て」*Amplexus expecta* という声を聞いている夢を見た。〔邦訳『歴史の研究』

第十九卷、四七〇頁〕

このことは恐らく彼の生涯で最も深遠な体験であった。もし彼の伝記を書くとして、このことを無視すれば、彼の思想と事業の全傾向を見失うことになる。」

「アーノルドは人類は剣によっても賢人によっても救われぬ、聖人によつて救われるということを知っていた。軍人でも哲学者でもなく聖人によつてである」

（川窪啓資訳「トインビーの最後の言葉」から）
トインビー市民の会編『現代とトインビー』第85号所収

No Image

トインビー博士との出会いの思い出を語る川窪講師。国際比較文明学会の副会長、日本ナサニエル・ホーソン協会会長などを歴任している

トインビーは、苦悩の中で自分を見つめ、自分の自己中心的精神状態を克服しようとして、他者の幸福を祈ったり、仕事に没頭しようとしたり、激的な努力を重ねています。

生涯に二度の精神的危機があり、そうしたなかで霊的存在との出会いもあったといえます。そうした個人的体験の中から、あの「高等宗教中心の歴史観」が生まれてきたのです。

次のようなトインビーの歴史観も、自己の体験に裏打ちされていると考えられます。

「歴史とは、誠実に神を追い求める魂の活動に於て自己を顕示する神の姿——それはおぼろげで、部分的なものではあるが、その限りに於て紛れもなく真実の神の姿——を見ることであると答えたい」（邦訳『歴史の研究』第二〇巻、四頁）

コロンバ師や、その他のカトリック教徒の影響で、トインビー自身もカトリックのほうに傾いていきます。それでも、先ほど申しましたように、彼は知的にはどこまでも不可知論者の立場を取りました。しかし、い

わゆる無神論者ではありませんでした。

こう書いています。

「人間であることは宗教を持つことを意味し、そして宗教を持つていないと宣言する人間はみずからの心を探ることができないために思い違いをしているのである（中略）宗教は宇宙の究極の精神的原理に対する探究である。そしてこの探究の目的は究極的な真理を学ぶという知的な目的ばかりではない。さらにそれ以上に、その真理と調和しようとするためにこれを学ぶという精神的な目的でもある。もちろんこれが、歴史的な高等宗教のそれぞれが信者を助けておこなわせようとしていることである。この共通の努力においては、私はすべての高等宗教の信者と一致している」（邦訳『回想録Ⅰ』、一九五頁）

未来の人類の精神的先達

彼の最晩年の宗教観がわかるものに、「暗中模索（Groping in the Dark）」というエッセイがあります。一九七三年九月に脱稿されたもので、まとまった長さの

文章としては、生涯最後のものです。『一歴史家の宗教観』（*An Historian's Approach to Religion*, Oxford University Press, 1956）の増補版（一九七九年、未邦訳）に収録されています。

このエッセイで、彼は「アルティミット・スピリチュアル・リアリティ（Ultimate Spiritual Reality）」について、「私は究極的精神的實在の性質が人格的なのか、超人格的なものかわからない」と言っています。究極的精神的實在——きわめて簡単に言えば「神」とか「絶対者」ということです。

神話に出てくる神というのは、大体人間のかたちをして動いていますね。信仰をもっている人は、だいたいな名前のある「何とかの神様」を信仰しています。そのように、神とは人格的なものなのか。一方、哲学的な人は、神をもっと抽象的、法理・法則的なものとらえる。仏教的に言えばダルマ、法でしょうか。神は、そのような非人格的な存在なのか。

トインビーは、どちらなのか私にはわからない、「暗中模索」だと言います。トインビーほどの人が最晩年

にも「わからなく」[in the Dark]だということです。この木のかたちの図(230頁)の一番上に「究極的精神的実在、その性質が人格的か超人的か分らない」とあるのがそれです。

もうひとつ、同じエッセイに「私は辺獄にいる」と書いてあります。「辺獄」というのは地獄の端っこにあるとされる場所です。そこにいるのは、キリスト教の洗礼を受けていないけれども、ある程度有徳な人々です。ダンテの『神曲』(地獄篇・第四歌)では、ホメロスら詩人や、プラトン、アリストテレスら哲学者などがそこにいます。トインビーは、自分はこの薄暗い辺獄にいますというのです。かたちの上ではキリスト教徒をやめたわけはありませんでしたが、彼の心と知性の中では、ひとつの宗教の枠を突き抜けた地点に達していたのでしょうか。キリスト教だけが唯一の真理だとは信じなかった。だから「辺獄」にいますと言ったのです。

たしかに、キリスト教的観点から見れば、トインビーは辺獄にいたかもしれません。しかし、もっと広く、宇宙的視座に立てば、「文明と宗教」という人類の外面

的・内面的な営みを徹底的に探究し、いかなる地点にもとどまることなく、どこまでも「真理」を探究し続けてやまなかったトインビーという一個の高貴な魂が、宇宙空間を飛翔している姿が目には浮かぶのではないでしょう。

それはある意味で、安穏な道を捨てた孤独な選択だったかもしれません。しかし、人類がもっと啓発され進歩していけば、彼の宗教観に共感する人々が多くなると考えます。その意味で、彼は未来の人類社会の一
大精神的先達であったと私は思っています。

質疑応答

【質問者A】トインビー博士は、歴史や宗教の研究を始めてから世界の平和のことを考えられたのか、あるいは世界の平和のために歴史や宗教を研究なさったのか。どちらが先でしょうか。

【講師】前者でしょうね。戦争を体験されていますし、平和への思いが強かったことは言うまでもありませんが、まずは歴史家として出発されている。人類の歩み

というものを探求しているうちに、文明とは何なのか、宗教とは何のためにあるのか、そういうことを考えるようになられた。そして、どうしても世界は平和でなければならぬ、宗教も互いに争うのではなく、平和のために協力していかなければならない、そういう信念になっていったのではないかと思います。

【質問者B】世界に、いろいろな宗教がありますが、長期的に見て宗教は統合していく、同じような方向にまとまっていくと、トインビー博士は考えていたのでしょうか。

【講師】ご本人が亡くなっていますから、これから先の未来のことは言えませんが、トインビーは、高等宗教は大体同じ方向のことを教えていると見ていました。愛とか慈悲というような教えですね。自己中心性を乗り越えていくことを教えている。また、どの宗教も人間の精神的欲求をすべて満足させるほど完全ではないと考えました。だから、宗教同士で喧嘩するのではなくて、お互いに話し合わなければいけない、そういう

ふうにトインビーは主張したわけです。

私自身も、いろいろな宗教があつて、それぞれ特徴があつて意味があると思いますけれども、文明が進んで、お互いに腹を割つて話ができる時代になつたわけですから、これからは争い合うのではなくて話し合つていかなければいけないと思います。お互いにいいところを学び合い、取り入れていく。そういう時代にならなければ世界は平和にならない。私は、そう確信しています。人間の知識というのは限界がありますよね。だから、「自分の宗教だけが絶対である。あなたの宗教は間違っている」、こういうことは断言できないと思います。宗教が戦争の原因となつたことが何回もあります。しかし、それではいけない。宗教は、平和をつくるものでなければいけない。そういうふうに、私は固く信じております。トインビーも同じだつたと思います。

【質問者C】トインビーの歴史観に対して、さまざまな批判もあつたのではないかと思います、その点につ

いてお願いいたします。

【講師】批判のひとつに「扱っている領域が広すぎる。そんなに視点を拡げてはいけません。もっと絞らなければいけない」というものがあつたと思います。「一人の人間がそんなにやれるわけではないだろう」という目で見られたわけです。

トインビーさんのいいところは、そんな批判に臆せず、拡げに拡げていったことです。ひたすら勉強して、研究に打ち込んだ。そのために、家庭をかえりみる時間も犠牲にした。それが最初の結婚の破綻に影を落としていると思います。しかし、そのおかげで今、私たちはトインビーの多大な遺産を読むことができるわけです。あんな人は、あまりいませんね。

私も、自分ではできもしないのに拡げるのが好きです（笑）。私はもともと英文科の出身で、アメリカ文学が専門です。とくにナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) の研究をしてきました。「注：日本ナサニエル・ホーソン協会会長も務めた」。『緋文字』(The Scarlet Letter) という小説が有名です。ホーソンだけでも大

変ですが、それだけやっていたのでは広くなりませんよ。アメリカ文学だけでも広くなりません。イギリス文学だけでも広くなりません。やはり世界全体の文学に目を開いていかなければならない。しかし、そうは言っても、これは広大無辺です。だから、いくらやってもまとまりませんが、トインビーはそれをやりました。彼の勇気と知的好奇心には、本当に頭が下がりますね。

私がトインビーに惹かれるのは、そういう広さ、深さです。それが魅力的です。もちろん、一人であれだけのことをやったのですから、細かいことを言ったら、いろいろ欠点も間違いもあるでしょう。彼は、自分は歴史の個々の現象を分析し比較研究しているうちに、だんだん形而上史学 (metahistory) の研究に入っていたと書いています（邦訳『歴史の研究』第二二巻、四一九頁）。そうしたことあつて、トインビーは、「そんなのは歴史学者のやることではない」という批判もされました。しかし、彼はどんな批判も恐れなかつたわけです。自分の信念の通りに邁進し、勉強していきました。

そして、ああいう世界的な学者になりました。やはり、
あれだけの人はいないと私は尊敬しています。

(かわくほ けいすけ／麗澤大学名誉教授)